演題1

フッ素徐放性シーラントに関する基礎的研究

一木数由、和田浩利、加藤陽子、小嶺隆一、
田中美絵子、本川渉

福岡歯科大学小児歯科学講座

フッ素徐放性シーラントを無処理で塡塞する方法を行っている。しかし、無処理のため脱落が起こりやすくなっていると考えられるので、シーラント脱落後のフッ素による齲蝕抑制効果について検討し、特に今回はその作用時間と抑制効果についてエナメル質表面のＳＥＭ観察を行い、グラスアイオノマーセメントと比較した。

実験方法

耐水研磨紙＃６００で最終研磨した牛歯エナメル質表面にφ５ｍｍの穴のあいたマスキングテープで面積を限定し、フッ素徐放性シーラントであるティースメイトＦとフジグラスアイオノマーセメントタイプⅢを塡塞した。それらを３７℃に調整した精製水中に１、７、３０日間浸漬した後、シーラント、グラスアイオノマーセメントを除去し、0.1M 乳酸 pH4.3に浸漬し１、７、１４、３０日後のレプリカ模型を作製してそれらの表面をＳＥＭ観察した。

結果

シーラント、グラスアイオノマーセメント共に、塡塞部は周囲と比較して脱灰が抑制されていた。これは塡塞後の作用期間に関係なく認められた。しかしながら、乳酸浸漬期間が長期になると塡塞部の脱灰の進行が認められた。

以上の結果からフッ素徐放性シーラントはグラスアイオノマーセメントと同様に塡塞期間の長短にかかわらず歯質に作用して耐酸性を向上させることが示唆された。しかし長期間浸漬した物では脱灰に進行が認められたため、これらが脱落した後はすみやかに再塡塞を行う必要があることが示唆された。

演題2

第一大臼歯の管理の実際と問題点

○岩崎仁恵，本田直子，西本美恵子
にしもと小児歯科医院・福岡市

健康な口腔と永久歯列育成，確立，維持を目指す小児歯科臨床においてウ蝕予防管理は大切な課題の一つである。昭和６２年度厚生省歯科疾患実態調査によれば第一大臼歯のDMF歯率は，５～９歳児で上顎が３８．５％，下顎が５８．３％，１０～１４歳児では上顎が６９．６％，下顎が８７．３％と依然として高く，第一大臼歯のウ蝕予防管理は未だ重要な課題である。

当院では定期健診において第一大臼歯の管理を行っている。管理方法は萌出前の予告説明から始まり萌出中は定期的なウ蝕予防管理を行っている。今回は当院で行っている第一大臼歯の管理の実際と管理のポイントを紹介する。

予防管理にはHome Care，ProfessionalCare，Community Careがあり，歯科医療においてはこの三つをバランスよく行っていくことが大切であるが，この第一大臼歯の管理法はProfessional Careとして予防効果も高く診療室で行いやすいのではないかと考える。

今回は，乳歯列期から口腔管理を開始し第一大臼歯の管理が終了し１年以上経過した小児について，予防処置状況，ウ蝕罹患状況について調査を行ったのでその結果を発表する。また，定期的に来院したにもかかわらずウ蝕に罹患したものについてはその問題点と，ウ蝕と乳歯期列のウ蝕状況との関連についての考察も行ったのであわせて発表する。